

【会員だより】

母校を巣立った短大の17回生が社会の荒波に立ち向かって活躍しています。その同窓生が、今の心境を素直な気持ちで書いてくれました。

仕事を始めて感じること

大阪医科大学附属病院 岡田 絵里菜(短17回生)

入職して半年近くが過ぎました。当院はベッド数約1000床と規模の大きな病院で、RIや放射線治療施設もあり、診療放射線技師43名の環境に恵まれた職場です。

最初の3カ月は研修として一般撮影とCTを学び、その後は主に一般撮影部門で勤務しています。学生時代の一般撮影の実習では、まず患者さんへの接遇やポジショニングができればいいと考えていましたが、仕事を始めると装置の操作や電話への対応など、撮影すること以外にも沢山の仕事があり、帰宅するとぐったりしていました。一般撮影で難しいのは「基本のポジショニングがとれない場合にはどう工夫するか」を的確に対応することだと思います。自分で考え、先輩方にアドバイスをいただいて撮影できたことが経験となり、少しずつ自信にも繋がってきました。

患者さんと接する場合にはコミュニケーションをとることを心掛けています。撮影室への案内時には挨拶をきちんとする、体に触れる場合は必ず声掛けをすることだけでも、相手の不安は取り除かれます。患者さんの表情を伺いながら体を動かすようにもしています。これが安全なポジショニングに繋がり、結果、患者さんにとっては安心で、技師にとっては確実に迅速な検査になると考えています。

自分の行う仕事が患者さんの今後を左右するのだと改めて気付かされました。私の撮影した画像が読影・診断され、治療方針が決まってゆくのです。画像一枚に責任を持たなければならない、そんな重要な仕事に就いたのだと改めて感じています。それと同時に、技術的にも知識的にもまだまだ至らないところが多々あると痛感します。早く仕事に対する不安要素を取り除き、それが患者さんへの安全な医療に繋がるよう努力していきたいと思っています。

日進月歩する医療についていけるよう、当院の中だけでなく院外での勉強会や学会にも積極的に参加して、日々自分のスキルアップを図りたいと考えています。



机上から現場へ 放射線技師として感じたこと

長崎市立市民病院勤務 白石 知美(短17回生)

私が現在、勤務している長崎市立市民病院は、1年次の夏季病院実習でお世話になった病院です。一般撮影・CT・MRI・マンモグラフィ・放射線治療・核医学まで様々な分野を学ぶことができる施設で、そして何よりも放射線技師の先輩方の患者さんに対する接し方にとっても心打たれるものがあったので、ここで放射線技師としての1年目のスタートを切りたいと思い、就職しました。

私が診療放射線技師として仕事をするにあたって常に心掛けたいこと、それは、忙しい業務のなかでも決して機械的な流れ作業のようになることなく、どんなに短い時間であっても、始めの挨拶から検査の説明、そして次の検査や診察へ送り出すところまで、患者さんの目を見て接したいということでした。しかし、現実には、次々と撮影があり、いかに効率よく患者さんを待たせずに、必



要とされる良い画像を撮影するかということに精一杯で、なかなかゆっくと患者さんの話を聞く心と時間の余裕が持てないというのが今の状態です。

そんな中でも、マンモグラフィに関しては、直接、乳房に触れて撮影するため、患者さんの不安や緊張、羞恥心を和らげながら撮影しなければなりません。検査前に患者さんの緊張をほぐす意味も込めてコミュニケーションをとり、検査中には常に声をかけながら患者さんの様子を見て圧迫していきます。淡々で行うよりも、検査をよりスムーズに、患者さんにもリラックスして検査を受けていただけているような気がします。一人一人にかけられる検査時間には限りがありますが、検診の方、すでに何らかの症状のある方、乳がん術後の方、様々な患者さんに対して、接し方、撮影の仕方、追加撮影の有無など、その都度、考えながら取り組むようにしています。

どの分野においても、その場の状況を見ながら判断を素早く行い、技師だけでなく、医師・看護師・受付の方など、様々なスタッフと連携を取っていかねばなりません。技師として毎日学ぶ撮影技術、医療スタッフとして学ぶ患者さんとの接し方など、机上で学んできたことが、実際の現場でどれだけ役立っているか分かりませんが、3年間で学んだことは、必ずどこかで繋がるものがあると思います。今はまだ、視野も狭く、応用力を身につけていませんが、これからも日々努力し、検査の内容や患者さんの疾患・容体などを結びつけて考えることができるようになりたいと思います。

診療放射線技師一年目で感じること

浜松医科大学附属病院 土井 龍典(短 17 回生)

3月に京都医療技術短期大学を卒業して、4月から浜松医科大学附属病院で勤務しています。大学病院ということで設備の整った恵まれた環境で約半年近くが過ぎ、日々知識の吸収に追われています。

私が主に担当しているのは、一般撮影、CT検査、DIPなどの泌尿器系の検査、消化器系の透視などの検査です。その中で主に一般撮影をしています。また、マンモグラフィ認定試験に向け勉強をしています。

学生時代は診療放射線技師になるための様々な科目を必死に覚えてきました。実際最初は一般撮影では国家試験対策の教科書のまま撮影していました。そのうち、それだけだと医師が見たい画像に対応できてないと先輩に教えていただきました。オーダーや患者様の状態によって求められる画像も様々で、それに対応したポジショニングも自分自身で考え撮影しなければなりません。それには学生時代に教えてもらった撮影技術や解剖の知識があって出来ることだと感じます。実践していくことは難しいことですが、技術のレベルアップに励み、臨床の知識を多く取得し、仕事にやりがいを感じるように頑張りたいと思います。

CT検査や透視での仕事では医師、看護師とのコミュニケーションがすごく大事です。検査していくにあたって看護師が行っている仕事内容も把握しなければならず、チーム医療の仲間と実感しています。

働き始めて大切にしていることは患者様に対する対応です。特に一般撮影では患者様と face to face なので、最初から最後まで嫌な気分にならないように心掛けています。患者様の不安を少しでも和らげるように検査の説明を行い、安心して撮影を始められるよう、言葉使いや接し方などにも気を遣うようにしています。介助を必要とする患者様のために、自分自身も介護方法の勉強会に出たりしました。その他に病院外の勉強会に出るようにして技術などを学んでいます。その学んだことが臨床の場で活かせるようにしたいと思っています。



最後に診療放射線技師として働いてわずかですが、常に向上心を持ちながら知識・技術を学びながら日々勉強していくことによって技師としてレベルアップしていきたくと思っています。

まずは、自分の体に関心を

滋賀保健研究センター勤務 三品 雄一(短 17 回生)

私は、検診業務に従事しています。私の会社での業務は、主に胸部撮影、胃部造影撮影、眼底撮影、腹部超音波、骨超音波、マンモグラフィです。毎日、県内の事業所を回り、検診を行っています。検診を受ける多くの人が、検診に対して面倒だと思っているようです。受診する人の多くが健康(自覚症状がない)だと思い込んでいるため、わざわざ受診のために時間を割きたくないからです。もし、現場で検診に時間がかかると苦情など色々言われます。



胸部撮影の場合には一日中撮影するため地味で単純そうにみえます。しかし、胃の撮影では、人によって胃の形が異なりなかなか望むように撮れません。また、腸へのバリウム流出のおそれがあるため時間の制約もあり、出来るだけ素早く撮影することが求められます。受診者を待たしてはいけない、読影しやすい画像をつくらなければならない、そんなプレッシャーもあって、初めはスムーズに撮影が行えず、受診者に迷惑をかけることが数多く空回りすることがありました。先輩に色々教えてもらいながら、少しずつ改善していきました。これからも更なる改善を目指し、先輩に一日も早く追いつけるように頑張っていきます。

検診業務で最も大切な事は、受診者にご自身の体に関心を持ってもらうようにすることだと思っています。そのためには、常に精度の高い検診を提供する必要があり、私達は、日々技術を高めていく必要があります。実際に検診による早期発見で助かる命も少なくありません。

検診結果を見ることによって、受診者の健康に対する意識も向上しています。さらに、今年から始まったメタボ検診(特定健診)がその追い風になっています。残念ながら、多くの人は忙しい生活のため自分の体は放置してしまいます。そんななか、時間を割いて受診して頂いた、皆さんの健康を影ながら支えることが出来る仕事にはとてもやりがいがあると思います。